

2018 年度行政学（前期）期末試験優秀コラム 4 本

新書の食わず嫌い

人は小説に比べると、新書を読まないように感じる。情報バラエティの人気本ランキングには小説が大多数を占めるし、私のまわりにも講義や課題以外で、もっと言うなら「娯楽」として新書を読む人はあまりいない。面白かったとおすすめしても、なかなか食いつきが悪いのだ。

これは、新書の堅苦しい装丁や、どこか教科書じみた題名の問題なのだろうか。私はそれ以上に、「専門知識がないと読めない」という先入観が邪魔をしているのではないかと考えた。

経済学、生物科学、心理学。どんな分野の学問においても最低的知っておくべき用語や考え方というものには存在する。しかし著者は人に読ませる爲に本を書いているのだ。素人にも分かりやすいよう基礎知識は噛み砕いて説明しているし、教科書のような無機質な「解説」にはない筆者の意見や感情がところどころに見え隠れする。そこにネットや辞書の助けは案外いらぬ。

起承転結があるという点においては、新書も小説も変わらない。違うのは構造要素だけだ。登場人物の行動や言動や心情、あるいは場面転換を追うように、基本を知って筆者の展開する話題を読み進めていく。読後に「頭がまた1つ良くなった気がする」という爽快感は新書ならではだ。

私はそういう訳で新書を小説のように愛読する。この楽しさを私だけが知っているのは、もったいない。

頼れる場所、真実はどこに

私の心が揺れ動いたニュースがある。いつも何気なく聞き流してしまうニュースだが私は聞き入った。青森女子中学生のいじめによる自殺である。2016 年いじめを訴えて亡くなった青森市の女子生徒について、約 2 年の時を経て市の審議会が自殺の主な原因はいじめによるものという最終報告書を教育長に答申した。

なぜこれほどまでに時間がかかったのか。前審議会では明確な根拠を示さず、自殺の原因を「思春期うつ」と指摘した。しかし実際には、女子生徒のいじめを訴えるメモ、遺書が残されていること、本人のスマートフォンには複数の同級生から SNS 上で死んでなどと書き込まれた画像が 100 枚以上残されていること、複数回いじめについて学校に相談したことなど明らかな事実が残っているのではないか。

遺族の思いが届くまで2年近くの歳月が流れた。遺族はこの2年間一体どんな思いをしてきたのだろうか。教育の場が積極的に動かなくてどうする、大人が子供のSOSに気付かなくてどうする、大人が子供を守らなくてどうする、大人が真摯に向き合い真実を追究しなくてどうする、様々なことが私の頭を巡った。憤りを感じた。

昨今見る他のニュースにも大人の在り方とは一体何なのかと疑問を抱く。子供たちは誰を頼ればいいのか、誰を信じればいいのか、真実はどこにあるのか。不信感は募るばかりだ。

「なんとなく」を「わかった上で」に

2016年、選挙権が20歳から18歳になった。私は生まれ年と誕生日の関係で18歳でギリギリ選挙権の年齢が変わって最初の国政選挙である参議院議員通常選挙に投票をしに行った。

正直なところ、改正後初めての国政選挙に、改正の該当者として参加できる「記念」的な気持ちが強かったが、適当に投票して自分の望まない方針に知らない内に加担するのも嫌だったので、manifestoが掲げられた動画を見てみたり親に聞いてみたりもした。しかし、18歳の私には用語も難しく、同じように聞こえてしまうmanifestoもあったりして、何をしてくれるのだろう、どこがどう他の人と違うのだろうと、結局なんとなく投票してしまった。

たかが一票、されど一票。一票の差でどうにかなってしまうことなどそうそうないだろうが、同じような人がいれば、それは何票にも何十票にもなってしまう。実際、私と似たような人も多いのではないかと思ったりもする。当時はとりあえず、若者も投票しに行くこと示してやる！という気持ちで行ったが、「なんとなくの一票」がどの程度効果を持つものか、それもわからない。とにかくわからないことが多すぎることだけはわかった初めての選挙であった。

とはいえ、「じゃあ学ぼう！」とするにも簡単ではない。基礎的な知識も必要であるし、状況はどんどん変わっていく。自分の中でよし悪しをはっきり決めるのが難しい案件も多い。そしてそれらの情報や選挙時のmanifestoなどを知る術も未熟だ。これでは私は一生迷って迷ってなんとなく投票し続けてしまうのではとすら思う。しかし私も大人になっていくのだ。少しずつでもわかることを増やして変わっていきたい。せめて、わかった上で迷えるように。

真実？うそ？

平成から年号が変わる。時が流れるうちに、社会は必ず変容していく。未来へつなげてい

くためには、負の財産と真正面から向き合う必要性がある。しかし、現代は、情報発信の多種多様化で、負の財産が塗りかえられようとされつつあると感じる。

私はつい先日、SNS を眺めていると、「福島原発の事実：福島県産は何も食べられない」などと書かれていた記事を見つけた。私は福島県出身であり、福島の状態について把握していると自負しているが、記事のような状況は、まったくありえないものだった。

よく見ると、この記事があるサイトはフェイクニュースを載せているサイトだった。フェイクニュースとは、あたかも事実のように、人々がおもしろがるようなネタを記事にするというものだ。他の記事を見てみると、現実離れしすぎている記事から、本当に起こりそうな記事まで、様々なフェイクニュースがあった。

その中で私がもう1つ驚いたのは、“いいね”の数だ。SNS で、その記事を見て、賛同したりおもしろいと思ったら押すものが「いいね」である。私は、被災地である福島県の人々がこわがるように記事を書いていること、多くの人がこのフェイクニュースを見ていて、その中の何人かはフェイクニュースと気づかないかもしれないことを思っとてもおそろしく感じた。

現代は様々な情報発信の形があるため、情報の取捨選択は非常に大切だ。しかし、それも難しいような事例はたくさんある。福島県への意識・偏見の復興をはばんでいるのは、とても身近なところにある。
